

---

# 南高1年C組

120-5031

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南高1年C組

### 【Nコード】

N2060L

### 【作者名】

120-5031

### 【あらすじ】

南高1年C組。偏差値50、部活動も他校と同レベルという、本来なら平民クラスの生徒たちが通うはずの南高。その南高において、1年C組だけが、色々なキャラの色々な奴を取り揃えている。そんな彼らが様々な騒動を巻き起こします。

## 第一話 ウルトラマート編？

全国トップクラスの学力を持つ奴のほとんど、いやこいつ以外は全員とてもがつくくらいご立派な優等生で品行方正な奴なんだろう。いや、こういう風に見えて実はこういう奴らには結構そういうのが混じっているんじゃないか。僕がこんな疑念を持ち始めたのはこいつと同じクラスになってからだ。

僕が所属するのは南高校の一年C組。

このクラス、一言でまとめるとしたら、「おかしい」。

まず僕の目の前の席の佐久間。こいつは先ほども言っていた全国トップクラスの学力を持つ奴。進学校は遠いから朝が大変、という理由で家が近い南高に入学した中学の同級生。

中学の頃は同じクラスになったことがなく、普通の優等生というイメージが強かったが、同じクラスになって見ると驚くことに、学校は遅刻。授業中には居眠り。そして、今は机の陰でゲームをしている。中学の時こいつと同じクラスの奴にこいつのことを聞くと、  
皆、

「あいつは優等生なんかじゃない。」

と口を揃えて言う。

そして誰もこいつの頭がどういう構造になっているのか理解しえない。

そして斜め後ろの席の月島。

誰もが認めるイケメン君。

入学したばかりの頃は相当女子に人気があったようだ。

しかし、こいつは馬鹿だ。偏差値50の南高によく入れたな、という程のお脳の持ち主だ。また、その他においても、某国民的アニメの主人公であるの 太並みの能力しか持ち合わせていない。

その他にも非常にキャラの濃厚な方々が揃っている我が組。他のクラスメートについてはまた後ほど説明する。

朝のHR。入学して凡そ一ヶ月。そろそろ高校生活にも慣れてきた頃だ。

今日は珍しく佐久間がチャイム十分前に登校していた。全員が席に座ったところで、担任が入ってきた。生徒の方はすぐ覚えられても、この担任は印象が薄い。

担任が伝達事項などを一本調子な口調で喋っている。

すると、佐久間が僕にノートの切れ端を渡してきた。ノートの切れ端には、

「今日の放課後屋上に来い。」

と書かれてあった。まさか男同士で破廉恥な真似はしないだろうな。

「何のようだ？」

「後で説明する。それどんどん回して行って。」

仕方なく僕は月島に紙を渡した。

担任が話を終えた頃には一番端の席の奴が紙を読んでいた。

四時間もの長い授業を終えて昼休みがやってきた。

この一ヶ月の間、弁当はいつも鹿島と一緒に昇降口付近の階段で食べている。

いつも何かを喋りながら昼食を食べているのだが、今日の話題は専ら佐久間の紙のことだった。

「佐久間が一体僕らに何の用があるんだよ。」

「知ってたか。佐久間って親と喧嘩して駅前のアパートで一人暮らししているらしいぞ。しかも、親つてのが結構な金持ちらしい。」

「なんでお前がそんな事知ってたんだ？」

鹿島は佐久間と同じ中学というわけでもないし、佐久間と前々から知り合いだというわけでもない。ただ、この手の噂話は鹿島が多

分クラスで一番把握していると思う。

「しかも男女問わずだぞ。」

「もしかして、生活費恵んでくれとか。」

「……ハハハハ……」

全く洒落にならなかつた。高校生男子は小額の小遣いで一月凌いでいるんだ。人に恵んでやる余裕なんてない。でも、頭下げられたら断りづらい。どうすればよいのだろうか。

なんてことを考えていたら、午後の授業の予鈴がなった。

とうとう、我々が恐れていた放課後がやってきた。

周りの奴を見ても見たところ全員が屋上に向かっている。

「でもすごいな。何の用かも書かずに屋上に来い、と言っただけでクラス全員動かせるんだぞ。」

「こんな状況だと俺達だけ帰るって訳にはいかないだろ。」

ということで、僕と鹿島が最後に屋上に辿り着いた。肝心の佐久間も既に着いていた。

「何なんだよ、佐久間。」

何なんだよとか言っておきながら、クラス一のヤンキーである澁澤も来ていた。

「突然だけど協力して欲しい事がある。」

「何だよ!」

澁澤の怒りがMAXに達しそうだった。

「うるせーな、澁澤。」

その声は、意外な人物からだった。確かあいつは天野という女子だったはず。このクラスでは珍しい良識ある一般人だ。

「天野ってあんなキャラか?」

鹿島なら知っているかも知れないと思って、僕は鹿島に尋ねた。

「澁澤はあいつだけには弱いんだ。」

「もしかして、あれか。」

「あれだ。」

澁澤に聞かれたら命が危ないのでここは「あれ」をお察ししても  
らうしかない。

「わかったよ。で、何だ？」

先ほどの勢いはどこえやら。澁澤は急に大人しくなった。

「個人的な事で申し訳ないんだが、今度うちの親の経営する会社が  
こちら辺にも進出してくる。それを妨害して欲しいんだ。」

「は？何言ってるんだお前。」

そんな声が各所から聞こえてきた。

「うちの親は多分こっちでも容赦しないぞ。鹿島。お前ん家の八百  
屋なんて放っておいたらすぐつぶれるぞ。」

「お前の親って何やってるんだよ。」

「ウルトラグループの経営者だ。」

僕を含める全員が唾然とした。ウルトラグループといえば世界に  
も進出する、国内最大級の会社だ。小売業以外にも様々な分野に手  
を出している。とすると、こいつはそんな立派な家の御曹司。こい  
つにはそんな片鱗ゼロだが、そして何よりも厄介なのは、あれだ。  
これは都市伝説なんだが、ウルトラグループというのは所謂「ヤク  
ザ」業界にも進出しているらしい。

「何もしなかつたらこの町はヤクザと金持ちに牛耳られるぞ。そう  
なると、面倒だ。」

「でも、それはそんなに俺らに関係なくねーか？」

鹿島が言った。

「大いに関係ある。ヤクザと金持ちに牛耳られると色々面倒だぞ。」

「で、ウルトラグループの進出はいつだ。」

「今週末だ。」

「もしかして、これのことか。」

月島が風で飛んできたチラシを皆に見えるように広げた。

「ウルトラマート 土曜日午前九時オープン」

そして、その下には、

「県内最大級のショッピングモール 是非皆様お越し下さい。」  
と書かれてあった。

「土曜日にオープンするってことは、ウルトラグループの奴らは明日あたりにでもこの町に来るぞ。」  
佐久間がやけに神妙な表情で言った。

今日は火曜日。開店まであと4日。

## 第二話 ウルトラマーケット編？

次の日の放課後。僕は鹿島と月島の三人でウルトラマーケットの予定地に行った。

「大体、佐久間はあーだこーだ言ってるけど別に協力する筋合いなんて全くないよな。」

鹿島がぼそりと呟いた。

鹿島だけでなくC組のメンバー全員がそう思っているだろう。しかし、佐久間のあの時の表情から察すると、佐久間はそうとう何かを思いつめているらしい。普段そうそううるたえたりしないような奴がいきなりああいう態度をとると、周りの人間は何事かと心配してしまう。

「折角ここまで来たから、すこし遊んで帰ろうぜ。」

月島の一言で、僕達は目的を忘れて近所のボウリング場で時間を潰した。

木曜、金曜があつという間に過ぎ去り、とうとうウルトラマーケットの開店の日がやってきた。佐久間の慌て様とは裏腹に、問題は何も起こらなかった。開店したウルトラマーケットに来店しようとする町の半分からいの方はウルトラマーケットへ足を運んだ。

「結局なんだつたんだ？佐久間があんなに慌てたのは。」

電話越しに鹿島がそう言った。遊ぶ場所がさほどない地方都市の高校生にとって、休日は友達と電話して時間を潰すのは有効な時間の利用だといえる。

その時、家のチャイムがなった。家には僕しかいないので、しかたなく出る事にした。一旦電話を切って、玄関まで行くと、僕は意外な訪問客に驚いた。

訪問客は澁澤。我がクラスの問題児だ。澁澤は僕が玄関の扉を開けるとすぐさま、



「おい、北野（僕の苗字）。俺のバイク仲間の千代田がヤクザに因縁つけられて、どっか連れてかれたんだ。お前、千代田探すの手伝ってくれよ。頼む。」

と懇願してきた。千代田は隣のクラスの奴だが、澁澤と同じくあまり柄がよくない。普段は彼らとの接点がないので、澁澤が僕に協力してくれと言う理由がわからない。

澁澤があまりにも頼むので僕は澁澤に着いて行くことにした。

「千代田が因縁つけられたのはここら辺なんだよ。」

澁澤が連れてきたのは、南高から西に数キロほど離れた新興住宅街。ウルトラマートに近いということが、僕の心に少し恐怖感を覚えさせた。

「あの、澁澤。もしかして佐久間に連絡したら何か教えてくれるかも。」

「そうだな。お前佐久間に電話しろ。」

佐久間は電話をかけるとすぐに出た。

「代われ。」

澁澤はそう言って僕の携帯を取り上げた。

「もしもし、佐久間。」

「澁澤か。お前の言いたい事は分かってる。隣のクラスの千代田とか言う奴のことだろ。」

「お前もう知ってたのか。どうすりゃいいんだよ？」

「大事にはならないから一旦落ち着け。」

「ん？ああ。」

「この町にはもともとヤクザなんて存在しない。だから、因縁をつけたとかいうヤクザはウルトラグループの一味に間違いないと思う。」

「それと、千代田の親は俗に言う過保護過干渉の部類だ。下手に時間かけると、親がサツにチクるぞ。」

「あいつらは、警察にチクられる前にはあいつを釈放するさ。あいつらは、ああいうことには頭が回るからな。」

澁澤が僕の携帯で佐久間と話していたとき、澁澤の携帯が鳴った。  
「千代田からだ。」

澁澤は驚きを隠せなかった。佐久間と通話中の携帯を僕に投げ返して、自分の携帯を開いた。電話の向こうの声は聞こえないが、澁澤の表情でどういふ状況になったかは大体見当がついた。

「千代田が釈放されただと。」

澁澤はそう言った。

「お前には、面倒かけたな。もう帰っていいぞ。」

澁澤は僕にそう言って、自分も颯爽とバイクにまたがってどこかに消えた。

帰り道のこと。

自転車に乗りながら家路を辿っていた時、大通りの向こう側でヤクザみたいのが誰か見覚えのある中年男性にからんでいたのが見えたような気がした。でも、僕がもう一度目を凝らして見ると、犬の散歩中の主婦が歩いていただけだったので、僕の頭の中は今晚の夕食のことで一杯になった。

家に帰り、携帯を開くと、メールが一件入っていた。鹿島からだ。

「親父がウルトラマートに行ったきり帰って来ない。」

僕はすぐさま鹿島の家に自転車を飛ばした。

### 第三話 ウルトラマート編？

商店街にある鹿島の家は僕の家からもさほど遠くない。自転車でも五分あれば充分に着ける。商店街のアーケードの前には鹿島と月島と佐久間、そして鹿島と同じく商店街に住んでいる同じクラスの菅原が既に来ていた。

「こういうことは、警察に任せたほうがいいんじゃない？」

月島が鹿島に尋ねた。

「うちに、ファックスでこんなのが届いた。」

鹿島は一枚のコピー用紙をポケットから取り出した。

「カシマ ヒロシ ヲ カンキン シタ。 ケイサツ ニ イッタ  
ラ イノチ ハ ナイ。 タスケテ ホシカッタラ ジダンキン  
サンゼンマンエン ヲ アサツテ ヨル ジュウニジ マデ ニ  
シハラエ。」

カシマヒロシ 鹿島博。目の前にいる鹿島勇人の父親であり、商店街の町内会長でもある。さしあたり、客を奪われた商店街の代表としてウルトラマートの店長に話をつけにいったのだろう。

「これでさ、母ちゃんは気失うし、弟は泣きだすし大変なんだよ。

今は商店街の大人達が父ちゃんを搜索している。人手が足りないから、お前らに電話したんだ。」

「でもさ、連中がお前の親父を監禁しているのが、たとえ市内だとしても探すのは難しいだろ。それにもうこんな時間だし、普通に歩いてても気付かないんじゃないかな。」

菅原がそう言った。菅原の言っている事は一理ある。

「じゃあ、親には友達の家泊まるって言うておいて、今晚はお前  
の家で作戦会議だ。同じクラスの奴とかにも連絡しといた方がいい  
な。」

僕は佐久間の提案に従って、一路鹿島家に向かった。

鹿島家は商店街で鹿島青果という八百屋を経営していて、一階は店舗、二階は住居という構造になっている。中学は違つが、高校生になってから数回彼の家を訪れたことはある。僕達は鹿島の部屋に案内された。

「狭い部屋だけど寛いでいってくれ。」

鹿島ではなく菅原が言った。鹿島と菅原は保育園時代からの幼馴染らしい。菅原は鹿島の家の間取りをしっている態だ。

「で、誰か協力してくれそうな奴はいたか？」

「男子は殆ど来れるって。」

「女子にも電話したか？」

「お前がしろよ。」

「なんで俺がするんだよ。お前がやれよ。」

「そつだ。月島がやれ。」

「俺が？」

「そつだ。月島が相応しいと思う人、手挙げて！」

月島以外の全員が手を挙げた。

「わかつたよ、仕方ねーな。」

「じゃあ、クラスの連絡網の一番最初の青木から・・・」

「お前家に電話かけてたのか？携帯にかけるべきだろ、そこは。こんな夜遅くにわざわざ女子の家に電話するなんて、向こうの親に変な疑いかけられるぞ。」

「やべ。気付かなかつた。」

これだから月島は馬鹿なのである。

「しかもそれ俺の携帯じゃん。」

月島は鹿島の携帯を使っていた。

「でも、女子の携帯番号なんて知らないしー。どうする？」

「そつだ、佐久間がかければいいんじゃない？佐久間なら親の間では評判が良いだろ。もし親が出てても、文化祭での出し物について聞きたい事があるんですがー、とか言えば問題ないだろ。」

「文化祭って何ヶ月後だと思つてんだよ、お前。」

「でも、月島よりはいいかも。」

一時間後、クラス全員に電話をかけ終わった。手元の時計では十時を少し過ぎたところだった。

「それで、鹿島の親父を探すことについてなんだが、、、、」

佐久間が話を本題に戻した。

「二、三人組で行動するのが一番やりやすいかな。お互いの連絡は携帯でとれるし。」

佐久間はさつさとパソコンでこの付近の地図を印刷して、ペンで丸やら長方形やらを書き込んでいた。こういう時に頭がいい奴がいてくれるとこちらとしては大変助かる。

作戦は二時間ほどで定まった。鹿島の部屋では、全員が寝ることはできないので、無駄話でもしながら朝を待つことにした。

「そういえば、なんで佐久間は家出したの？お前の家すげー金持ちだから全然問題とかなさそうじゃん。」

「俺も小学生くらいまでは家が金持ちだったのは少し自慢だったんだ。でも、次第にうちの親は金儲けって私欲の為にしか動いていないってことが分かってきたんだよ。そんで、俺はそういう親を見ていて、あんな風には絶対なりたくないって思ったんだ。」

「金儲けの為か。俺ん家は貧乏だから、お金に関してはすごいうるせーぞ。親父なんていつも金持ちは羨ましいとか言ってるぜ。」

「お前ん家大家族だからな。また新しく赤ちゃん生まれるんだろ。これで確か九人目だよな。」

菅原の家は今ですら四男四女の大家族なのである。菅原はその上から二番目だったはず。

無駄話がしているうちに夜があけて、窓から朝日が差し込んできた。た。

「朝か。。。」

時計の針は六時少し前を指していた。

遠くからバイクの音が聞こえる。その音はこちらに向かっているようだった。そして、鹿島家の前で止まった。鹿島がギシギシと軋

む窓を開けると、見覚えのある二人がいた。

「澁澤と千代田！よくこんな朝早くに来れたな。」

「家を抜け出すのも慣れた。それにウルトラマートのヤクザってのは俺を一回連れ込んでいるんだ。あいつらの居場所は知っている。」

突然の朗報に僕は我を忘れて喜んだ。

「喜ぶんなら鹿島の親父を助けてから喜べよ。」

佐久間がこの場の雰囲気の水をさすような発言をした。

「向こうにはヤクザがいるんだぞ。そいつらを出し抜かなきゃいかねーだろ。」

佐久間の言う通り。これに関しては、昨晚佐久間が立てた作戦さえ実行すればいいだろう、というか実行するしかないだろう。これで七人が揃った。話は変わるが、入学当初、澁澤や千代田には近寄らない方がいい、という印象があったが彼らも拘ってみると、案外いい奴だ。でもなぜ荒れたかということを知りたかった。中学時代の二人を知る奴はいない。

それから、数時間。思ったよりも人数が集まった。

「結構集まったな。」

「日曜は暇な奴が多いんだろ。」

「じゃ、ぼちぼち行く？」

「そうだな。」

集まったのはなんと、クラス全員。学校外でクラス全員を集められたのはある意味快挙だ。佐久間がそれぞれに指示を出し、残ったのは僕と佐久間の二人だけ。

「お前は俺に着いて来てくれねーか？ちよつとやりたいことがある。」

全員を見届けた後、僕と佐久間だけがみんなとは逆方向、ウルトラマートの方へ向かった。

#### 第四話 ウルトラマート編？

みんなが行った方向とは逆方向。佐久間に連れられて僕はウルトラマートまで来ていた。

「なんでこんなところ来たんだよ。」

「よし、説明するか。恐らくあいつらは同じ監禁場所を何度も使ったりはしない。だから、ウルトラマートに潜入して敵の情報を探る。まあ、俺とお前なら普通の客に見えるから大丈夫だ。心配するな。」

佐久間は歩き続けたが、食料品売場の片隅で止まった。

「ここから先は、関係者以外立入禁止だ。関係者って言ってもアルバイトやパートタイマーは入れない。ウルトラグループ直属の奴しか入ってはいけないようになってる。それって不自然だろ？」

「うん。で、それが鹿島の親父にどう関係あるんだよ？」

「ここに監禁されているとは言わないが、ここに潜入できれば何か重要なことを知ることができる。もしかしたら、鹿島の親父の居所の手掛かりとなるものも発見できるかもな。」

「でも、入ったらすぐ見つかるんじゃない？」

「それでだ。他の奴には連絡をとって、俺達は閉店時刻まで待つ。」

閉店後、客がいなくなり店員も帰宅した後が狙い目だ。親とか学校には俺から連絡しておく。俺なら疑われないだろう。」

そして、佐久間は菅原の携帯に電話をした。

ウルトラマートのフードコートで僕と佐久間が昼食をとっている時、月島から電話があった。

「もしもし、北野？」

「どうした？」

「千代田の言った通りの場所に来たんだが、何もなかったんだ。菅原が佐久間から電話があったとか言ったからさー、今何人かの奴はウルトラマートに向かっている。閉店まで待つんだろ。僕に何か出来

る事ある?」

「ちよつと電話変わつて。」

僕は佐久間に携帯を貸した。

「お前ら、全部で何人いる?」

「今は、三十人以上はいると思うけど。」

「そうじゃなくて、ウルトラマートに来れる人数。」

「あ、そつか。えーつと。」

暫くの間があつた。

「十人。僕と鹿島、菅原、菅原の姉と弟二人に、澁澤、千代田、天野、森野。」

「いつくらいに着きそう?」

「あと十五分くらい。」

「あつそー?分かつた。じゃあ、正面口で待つてるな。」

佐久間は右手に持っていたハンバーガーを一口で完食し、僕にも早く食べると急かしてきた。

十五分後、十人がやって来た。

十人の内、六人は既に紹介したと思うが残りの四人についても紹介しよう。

菅原の姉。菅原<sup>みお</sup>澯。僕達の二つ上の高校三年生。南高の三年A組に所属している、菅原兄弟の最年長。佐久間ほどではないが、頭がよく、見た目も可愛らしいので南高の男子にはそれなりの人気がある。実は鹿島はこの人に思いを寄せている。だが、鹿島と澯さんでは釣り合いがとれるかという懐疑の念を浮かべてしまう。

菅原の弟。菅原亮と菅原崇。小学六年生と小学四年生。亮も崇もいつも公園で友達と野球をして遊んでいるのでよく目にする、元気が取柄の二人。菅原家に於いては、次男と三男である。サ エさんで例えるなら、磯野力 オである。



森野慎吾。我が一年C組の学級委員。しかし、僕達の勝手な推薦でいやいや就任したような奴なので、学級委員に必要なリーダーシップには欠けるが、学校では真面目に振舞っているので先生や親からの評判はいい。うまいことやる奴である。

そんな十人が合流したところで、佐久間は、

「閉店時間になったら俺と北野で、ウルトラマートに潜入する。三十分経って戻ってこなかったら、お前らの内二人ずつ入って来い。それと、今晚は家に帰れないけど都合の悪い奴はいるか？」

誰も手を挙げない。鹿島や澁澤、千代田などはともかく、小学生の菅原兄弟や森野、天野が手を挙げないところからして、みんな相応の覚悟があるようだ。

暇なので、ぶらぶらとそこら辺を歩いて時間を潰そうとしたが、シヨッピングモールで何も買うものもなく一日を潰すのは意外ときつい。亮と崇は、近くの公園で野球しようと言いついで出た。

なんとか、亮と崇を言い包めて閉店時間まで時間を潰すことに成功した。

「まもなく、閉店のお時間でございます。皆様、本日はご来店頂き、誠に有難うございました・・・」

店内アナウンスが聞こえた時、佐久間が、

「じゃあ、各自トイレにでも隠れる。作戦を開始するときは、俺がメールを送る。音がしないようにしっかりとマナーモードにしようよ。あと、菅原の弟は携帯持ってないから、誰かと一緒に行動しろよ。」

菅原兄弟はそれぞれ、姉と兄の方に着いて行った。

僕が隠れたのは三階の紳士服売場の棚の下。覗かれてもしない限り、絶対見つからない所だ。僕は、佐久間の連絡を待った。

## 第五話 ウルトラマーケット編？

午後九時の閉店から一時間。午後十時を向かえると、見回りの店員の姿も見かけなくなり、あとは佐久間の連絡を待つのみ。しかし、佐久間からの連絡は一向に来ない。もしかして、佐久間が捕まったのではないかと危惧していたその矢先。

佐久間が僕の目の前にいた。暗がりの中なので気付かなかったのだろうが、佐久間は僕の前に暫くはいたようだ。

「おい、北野。」

佐久間が呟いた。

「そろそろか？」

「今から連絡をする。お前は先に、食料品売場まで行ってる。」

佐久間にそう言われたので、僕は真っ暗な中、止まったエスカレーターを下って行った。いくらショッピングセンターとは言え、真夜中に真っ暗で自分一人が歩いていると薄気味悪い。食料品売場は一階のエスカレーター降り口すぐそばにあったので、辿り着くまでにそれほど時間は掛からなかった。

食料品売場には澪さんと崇がいた。

「北野くん？」

澪さんの声だ。生憎今日は新月の夜なので、至近距離まで近づかないと敵味方の判別がつかない。

「僕ですけど。」

「佐久間くんから連絡があったの？」

「はい。」

「あそこですよ、店員ですら一部の人間でしか入れないって所は。澪さんは両開きの扉を指差してそう言った。そういえば、崇が先ほどから黙っている。」

「実はね、祟つたら怖がってるの。」

澪さんが僕の耳元で言った。澪さんの吐息が耳に当たっているの

には少し興奮する。こんな所を鹿島に見られたら殺される。

程なくして、全員が集まってきた。

「ここからは、全員で行動した方がいいな。」

佐久間はそう言っつて、一人一人に懐中電灯を渡した。準備の良い奴である。

両開きの扉を開くと、細い廊下が続いていた。

「ただのショッピングモールにこんな空間があるわけないだろ。」

佐久間は到つて冷静だ。細い廊下を暫く歩くと、地下に降りる階段があつた。売場の階段とは違つて急なので、懐中電灯がなかつたら到底降りる事は不可能だつた。

階段は螺旋状に、そして相当地下深くまで続いていた。最後の段まで辿り着くと、すぐ目の前にはドアがあつた。もはや、崇だけでなく天野までも泣きだしそうな始末。澁澤は泣くくらいならなんて来るんだと文句をつけていた。

ドアは以外と重く、二人掛でないと開かなかつた。ドアの向こうには再び細長い廊下。しかし今度はさほど長くなく、すぐに少し開けたところに出た。

「親父！」

沈黙を破る鹿島の声。

部屋の片隅に鹿島の父親が横たわっていた。

「大丈夫だ。眠っているだけだ。」

佐久間が脈を確認する。

「運び出すの手伝つてくれ。」

佐久間がそう言つたので、僕は鹿島の父親を負ぶつて、ドアを再び開いた。その時、僕は違和感に気付いた。

懐中電灯は一人一つのはずだ。僕の分を含めても懐中電灯は十二個しかないはず。なのに十三個見える。でも、数え間違いかもしれない。しかし、懐中電灯は全部同じタイプの製品だから全て同じ色のはずだ。だが、みんなは黄色い光なのに、一つだけ青白い光が見えた。青白い光の懐中電灯の主に恐る恐る自分の懐中電灯の光を当

てて見ると、見慣れない男が立っていた。

「おい、てめーら。こんなところでなにしとるんじゃ。」

「敵つい」という言葉はこいつの為にあるんじゃないかというほど敵つい巨漢の男が立っていた。その途端、電気が点いた。周りには巨漢男以外にも五、六人の男が立っていた。とてもカタギの人間とは思えない。ウルトラマートのヤクザってこいつらのことか。この状況でも物怖じしないのが澁澤と千代田。こういうタイマン勝負も慣れているのだろう。

「俺のダチの親父に何してくれとるんや。」

澁澤の語気が強まった。澁澤と千代田はこういう時に頼りになる。しかし、相手も去るもの。所詮相手は高校生なのだから、向こうは全然おびえる素振りを見せなかった。そして、巨漢男が澁澤の頬をグーで殴った。あまりの威力に澁澤は卒倒した。澁澤を一発で卒倒させる程の力を持つ相手に澁澤の横にいた千代田も思わず怯んだ。

その刹那、天野が巨漢男の鳩尾に一発パンチを入れた。巨漢男の動きが一瞬止まった。その隙を突いて、千代田が蹴りを入れた。その状況を見て亮と崇が参戦しようとするのを漣さんが止めた。

それでも、天野の攻撃は留まるところを知らなかった。

「あいつ、中学校の時空手部の主将で県大会で準優勝した実績があるらしいぞ。」

ここで、意識を取り戻した澁澤のママ知識。

巨漢男の後にいた男たちも続々参戦。一人の男が森野に殴りかかった。森野は辛うじてそれを防いだものの、バランスを崩し転倒。しかし、転倒した森野にとどめを刺そうとした男が森野の膝に引っかけかけて転倒した。そこにすっかり元気になった澁澤が背中に踵落としを決めて、相手を一人ノックアウトさせた。

亮と崇を守っていた漣さん以外は全員が参戦するという混戦状態に陥った。こちらの方が数的にも有利なので、戦局もこちら側が優位に立っていた。佐久間が、螺旋階段の上に登って言った。

「お前だけ逃げるつもりか！」

流石にこれには腹が立った。佐久間への怒りを拳にぶつけてヤクザたちを振り払う。が、ヤクザの一人が佐久間の方へ迫りよった。佐久間は待ってましたとでも言わんばかりに、右足を振り上げ、男を階段の上から突き落とす。

「みんな上に来い！」

佐久間は僕達にそう指示を送った。佐久間は階段の一番上の段にいたので、実際、迫り来るヤクザを全員蹴落としている。地の利を活かした巧みな戦法だと感心する。

そここうしている間にも、敵はあと巨漢男一人を残すのみ。巨漢男は階段を登るような真似はせず、亮と崇に向かって突進していった。それを見た澁さんが巨漢男の顔面に回し蹴りを入れた。

皆、澁さんのフラインプレーに感服した。

一時間後には僕達は商店街に戻っていた。

「明日から学校か。」

少し僕はいつもの日常に戻る事が嫌だった。みんなを見送って、残ったのは鹿島と僕。鹿島が嬉しそうな表情で、僕に、

「実はさっきの澁さんの回し蹴りの時、見えたんだ。」

「何を？」

「澁さんの……」

この卑猥な男の発言は書き記すまでもないだろう。因みに柄モノではなかったらしい。

商店街を後にした僕は、家へと帰っていった。

## 第六話 佐久間の新居編

四月が過ぎ、五月がやって来た。五月病とも言われる通り、高校生活にも慣れてきた今、倦怠感を感じている奴はこのクラスに何人いるだろう。

大型連休前の最後の授業の日。大型連休なのに僕には全く何の予定もない。

鹿島と菅原は町内会の旅行で信州に。月島はあまりにも頭が悪いので、まだ一年生にも関わらず親が勝手に塾の短期講習に応募した。澁澤と千代田はツーリングで他のバイク仲間と出掛けるらしい。

(あと残っているのは、佐久間と森野くらいか。。。)

C組には男子だけでもまだいるが、一緒に遊ぶくらい仲がよいのは以上の数名くらいである。因みに、あのウルトラマートの一件以降、澁澤や千代田ともよく喋ったりするようになった。

「おい、佐久…」

「あ、北野。お前連休中ヒマ？」

お察しの通り。ということは、佐久間もか。

「じゃあ、明日の十時に緑が丘団地前に集合で。」

そういえば、佐久間の家は駅前のアパートだったはず。佐久間は親との不仲の影響もあって、この町に一人暮らししている。高校生の一人暮らしというのは珍しいが、佐久間の生活力をもってすれば何ら生きていく上で問題になることはないだろう。

翌日。

緑が丘団地前に集合した僕達。僕と佐久間以外にも森野もいた。

「俺さー、引越したんだ。」

突然の報告である。こういうことは、事後報告なのか？

「ここが、新しい家。」

結局前の家には行ったことがなかったが、この家は何なんだ。

高校生の賃貸住宅としては異例の一戸建て。それだけでも驚きなのに、市内でも指折りの高級住宅地に三階建ての広さは百坪くらいはあるかという豪邸。

「お前、親から金貰ったのか？」

森野が恐る恐る聞いて見た。

「んなわけねーだろ。誰があんな馬鹿親のスネかじる真似すんだ。」  
あっさり否定された。

「ちゃんと自分で稼いだ金で買ったんだよ。」

「どうやったたらそんな金稼げるんだよ。」

「もちろん訳アリ物件じゃないから結構高かったよ。でもな、世界同時不況の昨今の経済情勢を見ると、鍋底状態とも言われているが、実はそんな中でも元気な業界っていうのがあって、そこで…」

まあ、佐久間の言っていることの八割は全く意味不明な経済用語であろう言葉だった。恐ろしい男である。

「でもさ。一人暮らしでこんだけでかい家だと、逆に手持ち無沙汰っていうか。」

贅沢な悩みであるが、ここは黙って佐久間の話を聞き続けるとしよう。

「俺は一、二階あれば充分だから、三階は俺達で自由に使おうと思つて。ここなら食料とかあるから、非常時にも対応出来るぞ。」

持つべき物は友である。しかし、ウルトラマートの件が片付いた今、何もそこまでしなくても。

「常に臨戦体勢であることは決して悪いことじゃない。それに、親と喧嘩したりしたときも、ここなら二十四時間開いています。」

まるで、コンビニの宣伝文句のようだ。

「ま、外で話すのもあれだから、中に入れ。」

佐久間の案内で早速新居に入る事にした。階段を登って、三階に案内された僕達。一、二階には結構物があつた印象なのに、三階には何もなかった。

「今は何もないが、そのうち生活に必要な物品全てを兼ね備えた完

全な空間をここに作り出すつもりだ。今日お前らを呼んだのは他でもない。この部屋に必要なものを買うための買い物をするんだ。どうだ、面白そうだろ。」

「あのさ、食事は下のキッチンで大丈夫だし、服は必要になったらその都度買えばいいじゃん。そうだ、寝袋は？」

「そうだな。じゃあ、寝袋も常備しとくか。」

「といって、佐久間は寝袋を十個大人買い。高校生はクレジットカードを発行できないので、当然現金一括払い。」

「お前、一気にそんなに使って大丈夫なのか？」

「ケチケチするとストレスたまるぞ。」

この点は、大金持ちの御曹司と言われても納得できるところである。我々庶民とは、金銭感覚が違う。その後も、立て続けに必要な物を買って、最終的に出費は数十万円となっていた。当然持ち運べるわけもないので、後日佐久間家に直接輸送されることになる。

連休も最終日。僕はウルトラマートに行ったメンバー全員を連れて、佐久間家に戻ってきた。

佐久間家には、僕達の生活拠点になるような物品が完全に備わった空間に様変わりしていた。

「これで、今度からここはみんなで使えるようになる。ここ合鍵も出来たから、みんなに渡しとくな。どうやら、外に階段を作って直接三階に入れるようにしたようだ。佐久間のアイデアによって作られたこの場所。後々、僕らにとっても大変役に立ってくれることになる。」



## 第七話 澁澤の家出編？

高校生にとって、連休が明けると、夏休みまでこれといった休暇はない。夏休みまであと64日。数えるほつがおこがましいか。

今日の昼も鹿島と弁当を食べている。

「佐久間の家、凄かったよな。」

今日の話題は佐久間の話。我々庶民の金銭感覚とは懸け離れた彼の思いきった買い物には、我々庶民は大変驚いている。

「今日も佐久間の家で時間を潰すか。」

帰宅部の僕と鹿島にとって、放課後は結構有意義な時間。勉強に時間を費やすような真似は決してこれからもしないだろう。佐久間の家を訪れるのは最近の僕達にとっての日課である。

昼休み終了まであと五分。教室に帰ろうとする僕達を、B組から出てきた千代田が止めた。

「お前ら、澁澤知らねーか？」

そつえば、ここ最近澁澤を見かけない。澁澤は連休明けから一回も学校へ登校していない。

「メールしても電話しても全く反応なし。お前らも知らねーか。」

澁澤の親友の千代田ですら、彼の行方は知らないらしい。

「お前ら、今日どうせ暇だろ。澁澤ん家一緒に来いよ。」

千代田の誘いに、僕達は断る理由がないので快諾した。

ホームルームの後、みんなにその話をした。

僕と鹿島以外にも、佐久間、菅原、月島、天野という何時もの面子が揃った。森野は野球部なので、部活があつて今日は来れないらしい。

「菅原、またお前の兄弟連れてくれば？」

鹿島は遷さん狙いか。こいつ邪な感情しか抱いていないな。

「そうだな、家に電話しよ。」

森野は携帯電話を取り出すと、家に電話した。

「もしもし。亮？兄弟全員連れて河川敷公園に來い。」

これは、鹿島にとっては予想外。

「多ければ多いほど役に立つだろ。」

菅原はそう言う。

「でもさ。小さい子とかってあんまり連れてこないほうがいいんじゃない。ほら、この前のウルトラマートの時みたいになるかもしれないしさ。」

鹿島が必死でフォローする。

「じゃあ、姉ちゃんに留守番と子守まかせて亮と崇だけでいいか？」

菅原よ。それは鹿島に対する仕打ちなのか。

「やっぱり多い方が賑やかでいいんじゃない。今回は多分ウルトラマートみたいなことにはならないと思うぜ。」

佐久間が鹿島の意思を受け継いだ。この瞬間、鹿島は佐久間に対してジューズ一本奢る事を心に誓った。だが、鹿島の邪な感情は菅原にバレていた。

「鹿島。姉ちゃんはフリーだから大丈夫。ただ、お前が義兄っていうのだけは勘弁して欲しい。」

菅原の何気ない一言だが、このとき鹿島の心は相当混乱していただろう。

「あ、ああ。」

鹿島の苦し紛れの返事。

僕達一行はとりあえず澁澤の家が近い河川敷公園に行った。先日、菅原家にはまた赤ちゃんが生まれた。然し希ちゃん（赤ちゃん）は生まれたばかりなので当然来ていない。菅原を入れて九人。何ともいえない大家族である。ここで、前にも紹介したかもしれないが、菅原家の兄弟を混乱しないように覚えよう。

菅原溇。先程からの話の通り、鹿島のアレだ。そう、アレ。それ

以上は聞かないでくれ。

菅原光。我らがクラスメイト。今更説明する必要もない。

菅原葵。中学二年生。外見は澁さんに似ているが、性格はいたって凶暴。

菅原亮。磯野力 オブラザーズの兄。

菅原崇。磯野力 オブラザーズの弟。因みに磯野力 オブラザーズについては、第四話を参照のこと。

菅原愛。小学二年生。小学二年生ながら某塾に通っているの百点とれるもん。月島より頭がいい。

菅原翔。幼稚園年中組。仮面ラダーが大好きである。よく日曜の朝早起き出来るものだ。

菅原希。ベビーカーに乗っている。まだ首が座っていない。

ここまででお気づきいただけただろうか。菅原家は全員名前が一字。因みに父親は誠で母親は恵。十一人これは珍しい。

紹介している間に、澁澤家の前に到着。案内は千代田でした。どうでもいいか。

チャイムを押したら母親が出てきた。澁澤の母親はいつて四十。とても高校生の息子がいるとは思えないほど若々しい。

「ごめんなさい。実は匠たくみ…」

ここにも一字の名前。しかし、澁澤母の表情からして何かあるのだらう。

「置手紙残して家出したの。」

「えー……」

当然、僕達は啞然とした。

「俺の家に来い。」

佐久間がそう提案した。

佐久間の家は広いので僕達全員が入りきれぬ広さだった。

佐久間は早速パソコンを起動した。

「澁澤の携帯番号からあいつの居場所を特定する。」

そんなことできるのか、佐久間。相変わらずお前は天才だな。

「北緯三十五度、東経百四十度……」

「どこだよ。」

「東京だな。」

本日再びのえー……、だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2060/>

---

南高1年C組

2010年10月11日01時33分発行